

平成 29 年度 モアショロ原野螺湾足寄停車場線
モアショロ原野地区の環境影響に関するワークショップ（第 2 回）

議 事 概 要

日時：平成 30 年 3 月 16 日（金）13：00～15：05

場所：とがち館 2 階 孔雀の間

出席者：《ワークショップ参加団体》

団 体 名	氏 名	備 考
足寄山友会	田村 勝夫	
帯広ウチダザリガニ・バスターズ	鏡 坦	
川と河畔林を考える会	高倉 裕一	
十勝川水系の生態系再生実行委員会	石垣 章	懇談会構成員
十勝自然保護協会	川内 和博	
NPO 法人 十勝多自然ネット	伊豆倉 米郎	
日本野鳥の会十勝支部	飯嶋 良朗	懇談会構成員
雌阿寒自然塾	岩原 榮	

《有識者構成員》

氏 名	専門分野	所属等
加賀屋 誠一（座長）	自然災害科学、都市工学	北海道大学 名誉教授
柳川 久	野生動物管理学	国立大学法人帯広畜産大学 副学長
飯嶋 良朗	鳥類（一般鳥類）	日本野鳥の会十勝支部 監事
石垣 章	淡水魚類	十勝川の生態系再生実行委員会
澤村 寛	地質	足寄町動物化石博物館 館長

《有識者構成員欠席者》

持田 誠	植物	浦幌町立博物館 学芸員
山本 純郎	鳥類（シマフクロウ）	環境省シマフクロウ保護増殖委員

《オブザーバー》

氏 名	所属等
岩淵 堅志	足寄町役場建設課 室長
末永 珠佑	環境省 釧路自然環境事務所 阿寒湖自然保護官事務所 国立公園管理官
三間 武	北海道森林管理局 十勝東部森林管理署 主任森林整備官

《帯広建設管理部》

氏 名	所属等
木原 俊哉	本部 事業室長
塩田 雅史	本部 道路課長
後山 英俊	足寄出張所 主査
三橋 祐介	足寄出張所 主任

《コンサルタント》

氏 名	所属等
田村 崇博	株式会社 ドーコン 交通事業本部 交通部
堤 公宏	株式会社 ズコーシャ 総合科学研究所 自然環境調査室
佐々木 香織	株式会社 北開水工コンサルタント 防災環境部 環境計画グループ

ワークショップ 意見交換会

十勝自然保護協会：

・蘚苔類の特筆すべき種について影響ないだろうとする理由は何か。

(ズコーシャ)：工事によって改変されない地点でも確認されているので、この地域に広く生育していることが推測されるため。※補足説明：蘚苔類については北海道内での調査・研究が進んでいないため、これらの種が貴重かどうかそれを判断するだけの情報がない。

・今後、蘚苔類の他の種についても更に詳しく調査するという事か。

(ズコーシャ)：蘚苔類について工事の影響に関する調査はあまり行われていないため、今後調査方法について有識者と検討する予定である。地衣類についても専門家を探すところから進める予定である。

・地衣類では、サルオガセ等があり、針葉樹林帯で気になる場所であるため、しっかり調査をお願いしたい。

(座長)：蘚苔類、地衣類の調査については経験の少ない分野ということなので、文献調査を含めて、希少なものはポピュラーなものがある程度はつきりさせていければと考えている。

帯広ウチダザリガニバスターズ：

・蘚苔類の特筆すべき種について、改変される予定箇所で見つかっているが、これは直接工事が行われる所か、又は工事箇所周辺ということか。

(ズコーシャ)：採取したところは直接工事によってなくなる箇所である。

・改変予定箇所で生育しているものが消滅してもそれ以外の周辺にいくつかあるのでトータルで数的にはさほど影響がないということか。

(ズコーシャ)：現時点ではそう判断している。

十勝多自然ネット：

・蘚苔類についても移植は可能なのか。

(ズコーシャ)：蘚苔類を移植した事例も少しはある。羅臼のヒカリゴケとか増やす試みなどはある。そういった事例から移植方法について調べる必要があると考えている。

・土砂の搬入をしないという説明があった。ここの土を国立公園外へ出すのは法律上大丈夫なのか。

(建設管理部)：公園内から公園外への搬出については法律的に可能かどうかも含めて公園側と協議を進めていきたい。

日本野鳥の会十勝支部：

・30年度の調査計画-鳥類について、クマガラ・希少猛禽類を対象とした調査の目的は何か。

(北開水工コンサルタント)：積極的な保全対象種としているためである。

・猛禽類はほとんどが希少種であり、猛禽類に限らず細かい調査を長く続けてほしい。

帯広ウチダザリガニバスターズ：

・法面の緑化工法について、周囲から種子が飛んできて発芽する場合、何かが生えている所に飛んできた場合と、まっさらの何もない所に飛んできた場合、種類によっては活着の割合が違ってくる。外来種は一般的に圧倒的に強い。あのような岩石の多い条件の悪い所で実際の例として外来種の入り込む割合についての知見があれば教えてもらいたい。

(建設管理部)：外来種がどこまで侵入しているかについて来年度、周辺道路で調査し、現状を把握する予定である。

・林道では道路ができるとすぐにセイヨウタンポポ、オオハンゴンソウ、場所によってはアメリカオニアザミなどの外来種が次の年から生えてくる。工事車両などに着いてくるのだと考えているが、モニタリングしながら対策を要することになると考えている。

(座長)：外来種についての対策は難しいことではあるが、モニタリングの必要や素早い対応も必要になってくると考える。

雌阿寒自然塾：

・切土法面の植生は、ステップをつけることにより大雨等があっても法面が崩壊せずに保全されるのか。

(建設管理部)：ステップがあることにより法面及び植生の安定につながる。

十勝自然保護協会：

・切土・盛土によって幅 30～40m が切り拓かれるとのことだった。道路建設後の景観は山の上からの見え方は全体から見ると大したことはないのではないかという評価だったが、画像からは結構切り拓かれている様な雰囲気があり、どういったものなのかと思う。あえて切土・盛土を作るということはできるだけ平らな道路にしたいということか。デコボコなりに道路を作っていくという風にはならないのか。なるべくデコボコの地形に応じた道路にすれば切土・盛土もそれほど差がなくなり、生態系に対して影響が少なくなるのではないか。

アップダウンがある道路は避難道路としてはまずいのか。

(建設管理部)：道路の目的として避難路として道路整備を計画している。無事通過して避難する車とか安全に山を下りられるように、交通事故等が起きるとその後方の車が逃げることができなくなる。本州の方の噴火などをみると救援に向かう車両も当然来るので、双方向安全にすれ違いができるような安全な道路を作らなければならない。それらを考えると地形なりにすると交通安全上避難が円滑に行えないと考えている。頻繁に昇り降りを繰り返すと制動の問題、カーブだけではなく起伏により先の見通しが良くないという問題が出てくるので、安全な通行のためには縦断勾配をある程度均していくことが必要と考えている。

(座長) 自然の豊かな所はあまり切土盛土がないような形で道路を作るのが望ましいと原則的には言える。ただ、縦断方向に起伏が多いといざという時に必ず渋滞が起きる。渋滞を起こさないためにはスムーズな道路が一番良いという形になる。避難時に住民が山から遠ざかる際、あまり起伏が多いと渋滞して避難を難しくすることも考えなければいけない。これは科学的にも実証されている。今回その辺のバランスをどうとるかという部分について我々が検討すべきではないかと考える。

・科学的に実証されているのか。

(座長)：横断の起伏があった時にはそこに渋滞の元がある。後程、できれば(資料)を提供したい。

十勝川の生態系再生実行委員会：

・冬期に火山の影響で湖の氷が溶けるような状況になった場合、大量の水がオンネトーから川にでてくることになるため、今回作った道路に影響を及ぼす可能性と影響の程度について今まで話には出ていないと思うので考えておく必要性を提案する。

(座長)：具体的に事業の設計がなされるときに必要な提案ということで考えていきたい。

足寄山友会：

・オンネトーの山の茶屋の近くにある小さい橋があるが、新しい橋はどのくらい下流に下がるのか教えてほしい。

(建設管理部)：計画ではほぼ現在の橋の横辺りになっている。

座長：

・盛土の高さが 8m、10mにしてしまうと盛土が破壊されるケースがあり、特に道東地域は地震で破壊されるケースが多く、十勝沖地震、根室沖地震でかなり破壊されている。その原因については盛土をする基盤と盛土の間の材料の違いが非常に大きいと考えている。5 m以上になると盛土の仕方、チェックの仕方を考えておく必要があると思う。あまりに高い盛土については慎重に検討してもらえればと考えている。

十勝自然保護協会：

・盛土代表断面図ではいずれも 5m、Cの断面では 8.5mとなっている。5m以上が多い。

(座長)：地震時の挙動は非常に複雑で、特に土の場合には解明されている部分は比較的少ない。高盛土が破壊される原因を確定するのは難しく、地山が極端に複雑な場合、土を盛る場合にどこかで滑るリスクがある。例えば 8.5mのCの断面は比較的地山が平坦なのでその分についてはそんなに問題ないのではないかと考える。

柳川：

・高さより道路の幅が動物の移動には影響が出ると思う。どの程度の影響かは詳細な図面などが出てこないと分からないので、今後考えていきたい。

雌阿寒自然塾：

・除雪については普段は通行止めで、噴火情報があったときに積雪 50 c m以上あれば除雪体制をとっていくということか。

(建設管理部)：普段は通行止めだが、噴火の予兆がなくても積雪 50cm 以上になると、噴火がいつ起きるか分からないこともあり速やかに除雪作業をする。そのため普段からパトロールで通行止めの現場まで行っている。そこで雪の量を確認し、50cm を超えると除雪し道路を開けておく。

川と河畔林を考える会：

・ レベル 2 相当の時に火口周辺は立入規制されるが、雌阿寒岳には「登山客があり」とある。これはどういうことなのか。御嶽山の反省教訓からこの辺は以前とは違った対応が考えられると思うがいかがか。

(足寄町)：レベル 2 相当で登山客がいることについては、レベル 2 相当でも小規模な噴火が発生しそうな兆候をとらえた場合、その状態でも登山客は避難していただく。平常時から 2 に上がって 3 へ或いはいきなり 3 以上ということもあるかもしれないが、登山中に噴火が起きてしまう場合もあるということで登山客がいるという表現をしている。基本的には逃げていただくことを前提にしている。

・ 火山防災計画のところが 10 年前と今ではかなり違う対応が求められていると思う。平成 27 年度版の雌阿寒岳防災計画に基づいて、これから 20 年、30 年先の対応を本当にそこに依拠して考えて良いのか。

日本の国立公園の中には、山岳地帯の観光地周辺自治体で防災計画に関する沢山の実践例がある。十勝岳、大雪の旭岳温泉、旭岳、有珠山、駒ヶ岳など大変多くの観光客が、活火山の近くに常におられる。アジアなど世界各地からの観光客がたくさん来ている。世界レベルのきちんとした対応が求められている。

(足寄町)：防災計画については、全国の火山の現状、状況を見ると考えていくことはたくさんあるかと思っている。そちらの対策についても引き続き、雌阿寒岳の火山防災会議協議会などを中心に、他の部分についても考えていかなければならない。頂いたご意見を今後に向けての参考にさせていただく。

・ 昨年 12 月に広島高裁は阿蘇カルデラの 30 万年から 10 万年の間の 4 回の大きな火砕流の事実を認めて、瀬戸内海を越えて山口県まで阿蘇 4 の火砕流が到達していたという事実を認めた。足寄の近くには阿寒の大きなカルデラがいくつもある。日々新たな知見が積み重なってきているし、火山学の新しい評価、成果も含めて火山防災計画も今までのままでよいのかということを心配している。このことについては別の場で意見交換ができればと思っている。